議事録

第３回県立高等学校再編振興作業部会

日　時　平成２４年３月１４日（水）９：００～１２：００
会　場　高知県教育センター分館　大講義室
出席者　垣内守男委員長、土居英一副委員長、伊藤正孝委員、梅原俊男委員、
川村泰夫委員、小松泰樹委員、高月琴委員、谷脇澄男委員、中村光宏委員、
中山美佳委員、中脇正人委員、橋本万里子委員
高知農業高等学校長 沖上芳幸オブザーバー
教育次長（池）、高等学校課長（藤中）、高等学校課企画監（森本）、
特別支援教育課長（田中）、高等学校課補佐（竹村）、人権教育課補佐（大西）
高等学校課チーフ（高野、竹﨑、北村）、高等学校課指導主事（４名）

１　開会
(1) 教育次長挨拶
(2) 日程説明、資料確認等
【配布資料】
① 次第
② 座席表
③ これまでの県立高等学校再編振興検討委員会等のながれ
④ 資料１－１　第２回県立高等学校再編振興作業部会の概要
⑤ 資料１－２　第３回県立高等学校再編振興検討委員会の概要
⑥ 資料１－３　県立高等学校再編振興検討委員会のまとめ案（産業教育について）
⑦ 資料１－４　定時制・通信制の在り方についての意見
⑧ 第３回県立高等学校再編振興検討委員会からの検討依頼事項
⑨ 第４回県立高等学校再編振興作業部会開催日程調整表
＜第３回県立高等学校再編振興検討委員会　資料＞
⑩ 資料２　第３回県立高等学校再編振興検討委員会　資料
⑪ 資料３　第３回県立高等学校再編振興検討委員会
定時制・通信制の特徴、現在の再編計画に基づく改編による成果、課題について
⑫ 資料４　県立高等学校再編振興に係るアンケート調査　報告書
⑬ 資料５　県立高等学校再編振興に関する地域懇談会　概要
⑭ 参考資料１　学級規模の違いによる教育課程の状況（例）
⑮ 参考資料２　学級規模の違いによる部活動の状況（例）

２　第２回県立高等学校再編振興作業部会の内容確認

（委員長）第３回県立高等学校再編振興作業部会を次第に沿って進めていきたい。最初に、前回の作業部会の内容確認を行いたい。事務局から資料１－１の説明をお願いする。

（高等学校課企画監：以下企画監）資料１－１の説明。
（委員長）事務局から説明があった。全体を通して質疑はないか。
（委　員）質疑なし。資料１－１を了承。

３　検討内容
⑴　報告及び協議１
①　県立高等学校再編振興計画に係るアンケート調査の報告
②　県立高等学校再編振興計画に関する地域懇談会の報告
③　県立高等学校再編振興検討委員会のまとめ案（産業教育について）

（委員長）次に、「３　検討内容の⑴　報告及び協議１」に進みたい。「①県立高等学校再編振興計画に係るアンケート調査の報告」について事務局から説明をお願いする。
（企画監）「第３回県立高等学校再編振興検討委員会　資料４　県立高等学校再編振興に係るアンケート調査　報告書」の説明。
（委員長）アンケート調査について質疑はないか。
（委　員）質疑なし。

（委員長）次に、「②　県立高等学校再編振興計画に関する地域懇談会の報告」について事務局から説明をお願いする。
（企画監）「第３回県立高等学校再編振興検討委員会　資料５　県立高等学校再編振興に関する地域懇談会　概要」の説明。
（委員長）地域によって懇談会を２回やったところはないか。
（企画監）県教育委員会主催の地域懇談会は報告した１２会場である。その他に、高校と地域が連携し懇談会を開催し、そこに県教育委員会を呼んでいただいたケースが２箇所あった。
　１つは、室戸高校で、１０月１５日に開催した地域懇談会室戸会場の出席者が、４名であったため、２月２日に再度企画され７５名の参加があった。
　もう１つは、清水高校で、地域懇談会幡多会場として四万十市で行ったが土佐清水市での開催が１月３１日に企画され３８名の参加があった。
（委員長）意見や質問はないか。
（委　員）なし。

（委員長）次に、「③　県立高等学校再編振興検討委員会のまとめ案（産業教育について）」に進みたい。第３回県立高等学校再編振興検討委員会の概要を事務局から説明をお願いする。
（企画監）「資料１－２　第３回県立高等学校再編振興検討委員会の概要」を「資料１－３　県立高等学校再編振興検討委員会のまとめ案（産業教育について）」で確認させてもらいたい。
（委員長）了承。

（企画監）「資料１－３　県立高等学校再編振興検討委員会のまとめ案（産業教育について）」の説明。

（委員長）産業教育について、検討委員会と作業部会から出た意見をまとめて説明をもらった。このまとめの部分が報告書につながっていくのではないかと考えられる。

検討委員会から作業部会での検討依頼事項があり、その中に農業に関することがある。本日、オブザーバーとして高知農業高等学校長 沖上芳幸氏に参加してもらっている。オブザーバーには、農業教育の方向性や農業高校の必要性について、また、１次産業の位置づけの観点から農業高校をどのように考えていけばよいか、ご意見をいただきたい。

（オブザーバー）このような機会をいただきありがとうございます。今までの検討委員会、作業部会の議事録を読ませてもらったが、農業教育をあまり理解してもらっていないと感じた。私は、農業教育が、教育の原点だと常に思っている。

前回の作業部会で、入学時から学科を細かく分ける必要はないとの意見があった。以前は、入学時から学科を細かく分けずに学校運営をしていた時期もあったが、失敗している。

中学生やその保護者に、林業についてのイメージができないのではとの意見があった。これについては、われわれのＰＲ不足だと思っている。

高知農業高校の農業従事者の子どもの在籍率は、一番多い時期では２４％程度であったが、現在では１割を切っている状況である。

オブザーバー作成資料「農業教育の必要性と今後の方向について」の説明。

１農業教育の魅力

「農を教育する」部分と「農で教育する」部分がある。農業のもつ教育力で、人間教育を行っている。

２地域との連携

地域の教育力を活用し、学校教育の足らざる部分を補ってもらっている。また、蓄積した教育力を地域に還元し、地域と学校がパートナーシップ関係にある。

３本県における農業高校の必要性について

本県の強みを生かした農業の担い手育成を目指し、郷土を支える貴重な人材育成を行っている。また、農業を理解して他の職業に就くことにより、別の視点から農業を支援する人材育成にもつながっている。起業家の育成にも力を入れており、「ぶんたん缶詰」など、生徒の自由な発想による商品開発に取り組んで成果を上げている。

４今後の対応

農業の良き理解者を育成し、「農と食料」、「農と医療」など連携の強化が望まれている。

生徒数が増加した時期には、高知市に高校を新設したり、定員を増やすなどの対策をしてきた。今後は生徒数が減少していく時期となるが、まず高知市の高校から減らすべきだと考える。

農業に関する学科は、だんだんと減ってきている。高知県の１次産業を考えると農業高校は、維持していくべきである。本県は工業県でないので、産業系学校の再編を考えるとまず、工業高校から減らすべきである。

産業教育の振興のため、水産では土佐海援丸を造ったが、農林業に関しては支援がない。また、林業の振興を考えると、林道の整備が必要である。教育現場での整備を望む。

６次産業や１．５次産業は、１次産業が元気でないと産業として成り立たない。農業高校の再認識をしてもらいたい。

（委員長）高知県の強みである農業の担い手の育成をしていかなければならない。起業家教育や他の産業との連携など農業の新たな展開を考えていかなければならない。資料１－３のまとめについて何か意見はないか。

（オブザーバー）入学時から学科を細分化する必要がないとの意見には反対する。また、情報発信については、報道各社に取り上げてもらうと反響が大きい。新聞紙面に取り上げてもらうと学校は、活気づく。

（委員長）資料１－３の工業のまとめに進んでいきたい。

（委　員）工業に関するまとめについては、大まかなところでは理解できる。

オブザーバーから一括募集の話が出たが、前回の作業部会の中で、専門系学科が細分化され、各学科の内容が中学校側に伝わっていない現状があるので入学時の募集方法を考える余地があるのではとの意見であった。中学生やその保護者に対して、専門系学科の情報をもっと発信していくべきであると考えている。

産業系専門高校においては昭和後期に学科の枠を超えて学習する共通科目が数科目あった。工業高校でもその時期には、共通の科目を学習した後に専門学科を深く学ぶシステムが採用されていた。しかし、このようなシステムは、現場に合わなかったので、２０年ぐらい前から今のシステムになっている。産業系専門学校では、３年間で専門教育を完成させなければならない。１年生時から専門分野に分かれて学習していかないと卒業時までに習得すべき知識や技能が間に合わない状況であるため、入学時から細分化しているのではないかと思っている。

各学校で学校評価のアンケートを行っている。勤務校の話になるが、内容を少しずつ変えながらやっている。入学生に対して、「中学校時の先生はあなたの進路指導に対してどのようなアドバイスをしてくれたか」、「工業についてどのような資料を提示してくれたか」、「あなたは提示された資料についてどのように活用したか」など具体的な内容を入れている。また、基礎学力について「あなたは取り組めているか」、「学校の先生は、あなたにどのような指導をしてくれているか」、キャリア教育や進路指導については、「学校の提示資料は適切であるか」、「資料をどのように活用したか」、「進路について

保護者の方と相談はできているか」など具体的な内容を取り入れることにより学校評価の質問を変えてきた。どの学校も６割から８割は良い評価をもらっている。あとの２割を埋めていくには、具体的に個々に応じた学校評価に取り組まなければならない。このような取組が産業系高校について中学生やその保護者への情報発信につながっていくのではないかと思う。小学校や中学校の先生の中には、工業高校や農業高校出身の先生は少ないと思うので、高校側がアクションを起さないと情報は伝わらないと考える。高校側のアクションにより、中学生の意識も変わってくると思う。

専門高校の良いところは、各科４０名程度であるので目が届きやすく、手厚く生徒を見守れる。

キャリア教育についてであるが、生まれてから大人になるまでのモデルが必要である。幼・保から大人になるまでにどのようなことがあるかを示す必要があると思う。このようなモデルの中で勤労感が育って行くのではないかと思う。このような考えが、定時制・通信制の在り方にもつながるのではないかと考える。

（委員長）資料１－３工業のまとめ④⑥は今後の枠組みについてになっているが、これに関して意見はないか。

（委　員）このまとめのなかで工業高校の枠組みが決まっていくと思うので、少し意見を述べたい。工業教育には、技術、技能という言葉がある。大学の教育内容は、技術に特化し、机上の論理が中心となっている。高校の教育内容は、技能を体で覚えていく教育方法である。昔の職人教育に似ている。企業を考えた場合、技術集団のみの企業は通用していない。技術を可能にするには、技能集団が必要である。技術と技能の双方をもった企業が大切にされている。技能集団をどのような形で育成、継承していくかが大切である。小中高又は、中高で「モノづくりの連携学校」があっても良いのではないかと考えている。そのような連携により、産業を見直すことにつながるのではないかと思う。このようなことを考えて次期計画を検討してほしい。

（委員長）次に、商業について意見はないか。

（委　員）意見なし。

（委員長）水産、看護、福祉についてもまとめを意識していかなければならない。

（委　員）林業についてもう少し詳しく聞きたい。また、高等学校の専門系分野の内容については、中学生や保護者に伝わっていない現状があるので、入学後ミスマッチが起こり、中途退学者が出たりしているのではないか。高校と中学校との教員側の意識の違いがあるのではないか。情報発信は、メディアを通してだけでなく、中学側と高校側の組織の中での内容の連携をどこかで図ってもらいたい。

（教育次長）林業について質問したい。林業は、就職として成り立っていくのは難しい状況であると思う。森林率が８４％を占める高知県において、県の森林資源に対して、どのように高付加価値を付けブランド化していくのか、高等学校でどのように林業を支えていくべきであるか、お聞きしたい。

東日本大震災直後、首都圏が水不足になった。その時、県内の水を売り出そうとしたが、ペットボトルのキャップが不足し、商品を流通することができなかった。産業振興を考えたとき、農業の力だけでなく、工業の力や流通の力が必要になってくると思う。他の産業との連携が必要であると考えるが、オブザーバーの意見を聞きたい。

（オブザーバー）林業については何とかしていかなければならない。四国管内の森林管理局（営林署）の職員は、九州出身者が多く占めている。高知県や四国からの地元の者が就職してもらいたいと思っている。県の林業職は、ここ２年は採用試験を行っている。このような将来の道もあることを高農伝言板で、各中学校に発信している。しかし、中学校側への情報提供は、まだまだ不足している。公務員以外にも森林組合にも女子職員が活躍している状況になっている。今後も人材育成は必要である。

特に、森林から木を取り出す人材育成が必要である。林業には若い人材が求められている。このような林業に関する人材育成に近い位置にあるのが農業高校の林業科である。本校では、ログハウスの技術なども教えている。

産業としての林業は、外国材や集成材が安く流通して、県材が押されている。建材としての木材の需要が伸びない限り林業は、成り立たない。

（委員長）県材の活用が大切である。高知の木材、漆喰、紙が財産である。これらの財産を工業や芸術などの他の産業との連携を図ることも必要である。また、県の財産を県外で活用する方法も考えていく。中学校と高校との内容の共通理解の連携との話があった。まとめの産業教育全体の④の中に内容の共通理解のような言葉をプラスしてもらいたい。

（オブザーバー）農業の部分に、農業に関するバイオ技術関係を担う人材育成も大切であるので、まとめの中に、バイオ技術も入れてもらいたい。

（委員長）沖上オブザーバーありがとうございました。ここで休憩を取りたい。

＜オブザーバー退室＞

（休憩）

（委員長）それでは、再開する。「(2) 説明及び協議２（定時制・通信制について）」に進んでいきたい。

(2) 説明及び協議２（定時制・通信制について）

説明① 定時制の現状について

説明② 通信制の現状について

協議① 定時制・通信制の在り方について

（企画監）「第３回県立高等学校再編振興検討委員会 資料２ 第３回県立高等学校再編振興検討委員会（以下、資料２）」「第３回県立高等学校再編振興検討委員会 資料３ 第３回県立高等学校再編振興検討委員会 定時制・通信制の特

徴、現在の再編計画に基づく改編による成果、課題について（以下、資料３）」の説明。

（教育次長）第１次再編計画に係わった立場から発言したい。資料２　Ｐ３（３）多部制の定時制課程について補足したい。本県では、中芸高校、高知北高校、大方高校が多部制の高校に当たる。高知北高校は、従前からの昼間部定時制をベースに午前に４時間授業を行い、更に午後にも授業を履修することにより３年間で卒業できる定時制である。しかし、中芸高校と大方高校は、全日制と同じように６時間授業のカリキュラムをもった新しいタイプの昼間部の学校である。再編計画に携わり新しいタイプの学校を設置した立場から言うと、定時制の課程を運用した新しいタイプの学校とした位置づけである。県高等学校総合体育大会（県体）においても全日制の部に参加できる体制を取っている。我々としては、全日制に近い学校と認識している。資料には、新しいタイプの学校も定時制として扱っている。就労生徒数の割合が減っていることや、中学校新卒者の入学が増えていることは、これらの学校の影響がある。従来からの夜間の定時制だけでなく、新しいタイプの学校も含めて議論してもらいたい。

（委員長）従来の夜間部の定時制とともに、昼間の定時制、多部制単位制高校の在り方を議論していきたい。

　進路のところで、資料２　Ｐ１２　６　高等学校定時制課程・通信制課程卒業生の就職状況の ④ 就職率 計 の数字についてであるが、平成２２年度定時制全般で５６．５％であるが、この数字には、多部制単位制を含んでいるのか。また、夜間部の生徒の中で、在学中に就業している生徒もこの就職率に含まれているのか。

（企画監）この数字は、定時制課程全ての数字である。そのため、夜間部、昼間部、多部制単位制を含んでいる。

（委員長）夜間部の就業している生徒も含まれているのか。

（企画監）夜間部生で、就業している生徒数は、④ 就職率に含んでいない。しかし、⑦ 就業率は、新規に就職した生徒と在籍中に就業していた生徒を含んだ数字である。

（委員長）定通教育の抱えている課題について何かポイントを絞っているか。

（企画監）夜間の定時制には、勤労青少年が通学している。このことを配慮すると通学範囲を考えた地域性を議論する必要がある。

　また、就業していない生徒、中学新卒者、様々な学習歴をもつ生徒への対応について、定時制がどのような役割を担って行くかを議論してもらいたい。

（委員長）定時制の配置と中学新卒者が多くなっている状況があげられた。

（企画監）中学新卒者が入学している状況で、その中には進学を希望している生徒もいる。進学体制を含めた対策が必要である。

（高等学校課長）先ほどの委員長の質問に対する説明の補足である。資料２Ｐ１２の ④ 就職率は、就職希望者に対する新規就職者数の割合である。全体に対する新規就職者数と在学中の就業者を加えた数の割合は、⑦ 就業率として

表している。

（委員長）次に、定時制通信制教育の中身について議論していきたい。

（企画監）検討委員会からの検討依頼事項を含めて議論を進めてもらいたい。

（委　員）高知北高校では、教職員間の連携、保護者との連携、関係機関の連携、３つの連携がよくなり中途退学者数が減ってきた一つの要因であると前回発言した。課題面を上げると進路指導面である。毎年、３０％程度の生徒が進路を決まらずに卒業している。

課題の原因として、６０％位の生徒が中学校時代不登校を経験しており、高校に入学後は通常に登校しているが少し遅刻や欠席が多いところで、就職試験などで不利になっているのではないかと考えている。

保護者と生徒の意見の不一致があり、経済的な理由もあり、なかなか進路が決まらない。

保護者も生徒も学校に通学するだけで満足しているために次の進路を考えていない意識の問題もある。

意識の改革に向けて、早い時期から分野別進路説明会を開催したり、３年生には、経済的な面も含めて国立大学に進学した場合、専門学校に進学した場合などに分けて学費を掲示し具体的な進路指導を行っている。学力面では、個々の能力の差が大きいので、進学を希望した生徒への補習、基礎学力を補う補習に分け、能力に応じた指導を行っている。卒業後もサポートステーションとの連携も行っている。

生徒たちに、あれもこれも要求してしまうと、潰れてしまい学校を休んでしまう場合もある。生徒一人一人に寄り添って、細かく様子を見ながら支援をしていくことが大切である。一斉指導ではなく、個別指導で手厚く指導して行くことが大切であると感じている。

（委員長）経済状況の観点からみると、どのような状況であるか、答えられる範囲でお願いする。

（委　員）家庭の経済状況は、厳しい家庭が多いと思う。家庭の状況が、生徒自身の状況に大きな影響を与えている。家庭の経済的状況や家庭の問題をそのまま背負って生活している。家庭の状況のため、自分の思い通りに学習ができなかった生徒もいる。また、進学したくても経済的理由で、進学できない生徒は多いのではないかと思う。様々な奨学金の説明会を開催したりしている。本来は、生徒の成績を考えながら指導をしていくが、進学の場合には学費がいくらかかるのかを伝えながら指導を行っている。

（委員長）昼間部と夜間部とのニーズの違いを感じることはあるか。

（委　員）昼間部に籍があるので、夜間部との生徒との交流はあまりない。そのため、夜間部の状況は正確には掴んでいない。夜間部でも就業している生徒が減ってきており、中学新卒者の割合が高くなっていると感じる。通信制に関しては、５割近くが中学新卒者で占めている。このように、夜間部、通信制も昼間部と同じように様々な学習歴をもった生徒が多くなり、ニーズについても昼間部に近づいていると感じている。以前に、昼間部の生徒と夜間部の

生徒が国立大学を目指し学習した例があったが、進路希望についても昼間部の生徒と同じような傾向になってきているのではないかと思う。

（委員長）特別な支援を必要とする生徒の割合について教えてもらいたい。

（委　員）高知北高校昼間部では、保護者から申し出があった特別な支援を必要とする生徒の割合は、１６．５％である。

（委員長）そのような生徒への手立てには、どのような方法があるのか。

（委　員）特別な支援を必要とする生徒だけを訓練するシステムはない。特別支援教育学校コーディネーター、学校カウンセラー、養護教諭、人権教育主任の４人が中心となって支援体制を整えている。

視覚的に工夫をした授業展開をしたり、授業展開を最初に伝えるなど授業の中でも工夫をしている。高知大学と連携し、大学生のピュアカウンセラーが授業に入って特別な支援を必要とする生徒のサポートをしてもらっている。特別な支援を必要とする生徒がいるということで始めた取り組みであったが、特別な支援を必要とする生徒が分かりやすい授業は、すべての生徒に分かりやすい授業である。このことにより生徒の学力も上がってきていると感じている。

（委　員）学習上や生活上に困難のある生徒、多様なニーズのある生徒の割合は、定時制・通信制に学ぶ生徒の中に比較的多いと文部科学省の調査報告にもある。本県も同じ状況ではないかと思う。このような状況になると特別支援教育の視点を重視する取組が必要になってくると考える。特別支援の視点とは、教育ニーズを満たす教育をいかに展開していくかである。これは、次の３つに集約されると思う。

１つ目は、基礎基本学力の定着である。習熟度別少人数指導であったり、１コマの授業時間を弾力的に短くしたりして、分かりやすい授業を徹底的にやっていくことである。

２つ目は、キャリアガイダンスである。自分を肯定的に受け止めることであったり、ビジネスマナーなどの社会性であったり、人間関係を上手くやっていくためのコミュニケーション能力を身に付けることであったり、将来設計をしていく力であったりする。

３つ目は、就労体験である。これにより就職後のミスマッチを防ぐことにつながると思う。

この３点を高等学校で実施していくには、的確な指導を行える教員を育成すること、特別支援学校との連携により指導法を学ぶこと、中学校との連携により生徒の接続時の情報を共有することが必要となってくるのではないかと考える。これらは、特別支援教育の視点であるので、特別な支援を必要とする生徒の多くが在籍している学校では、このような考え方が必要になってくるのではないかと思う。

（委員長）特別支援学校との連携も大切になってくる。地域バランスをどのように考えているか。

（委　員）定時制の必要性について述べたい。小学校高学年の中には、うまく人間関係を築けない児童が増えてきている。このような状況の中、人間関係をうまく築くことができないまま中学校を卒業している生徒が多い。このような生徒は、高知北高校のような定時制の学校に救われている。また、保護者の方も安心して生徒を通学させている。このことを考えると、定時制・通信制の学校は必要であると考える。

　地域性については、全体の生徒数の多いところに、特別な支援を必要とする生徒も多いと思うので、生徒数の多い中心部にニーズがあるのではないかと考えている。中心部に配置されていることは、通学の面で見てもありがたいことである。また、このような生徒は、中心部以外にもいると思うので、定時制・通信制の現在の配置は現状のままで良いのではないかと思う。

（委員長）全日制と定時制を併設している学校は、一つの施設を使用しているので、昼間は全日制、夜間は定時制となっている場合が多い。もっと昼間部の定時制が必要という意見はないか。

（委　員）保護者からみると定時制は分かりづらい。以前は、学び直しの場であったり、勤労青少年の学ぶ場であったりしていたが、今は、特別な支援を必要とする生徒の受け皿のような機能の学校へと変わってきているのか。

（企画監）現在、勤労青少年の割合が減り、特別な支援を必要とする生徒の割合が増えている。

（委　員）特別な支援を必要とする生徒を指導するには、ある程度の数の教員が必要であると思う。高校の現場では、支援する教員数は足りているのか。

（委　員）高校では、通常１クラス４０名で運営されている。しかし、高知北高校では、１クラス２０名で運営している。この２０名学級が、生徒一人一人に目が届き、きめの細かな指導につながっている。

（高等学校課長）小中学校では、特別支援学級を設置することができ、専属の教員の配置ができる。しかし、高等学校では、４０名規模の学級数を基準に教員数が決まってくるので、配属教員数には限りがある。高知北高校の取組の報告の中にあったように、大学との連携により、大学生を活用する方法などで支援を行い学校運営がうまく回っている。しかし、すべての定時制で、支援が上手くいっているとは言い切れないのが現状である。高知北高校は、特別な支援を必要とする生徒への指導法のモデルケースでもある。様々な生徒への対応については、教員だけでは難しくなっている現状があるので関連機関との連携が必要となってきている。

（委　員）定時制の中には、進学を希望している生徒の割合が多いと感じる。中学新卒で入学している生徒が多くなっているからこのような傾向だと思う。進学希望をしている生徒へのサポートはどのようになっているか聞きたい。また、進学状況について分かる範囲で教えてもらいたい。

（企画監）高知北高校では、国立大学に合格したり、私立大学に合格している生徒も数名いる。また、専門学校にも進学している。大学１４％、短大６％、専修学校４１％、就職８％、その他３０％である。

（副委員長）多様なニーズをもった生徒、特別な支援を必要とした生徒、不登校生が増えてきた中で、学校として特別支援教育学校コーディネーター、カウンセラーで指導体制を整え、個別指導のための人員の増員をしたりして対応していることは、１０年ほど前から、小中学校現場で直面してきた課題でもあり、同じような議論をしてきた過程がある。

定時制・通信制を特別な支援を必要とする生徒の受け皿としての存在で考えるのではなく、特別な支援を必要とする生徒などに対応可能な学校としての位置づけにしていくことが大切である。それぞれ一人一人に応じた教育課程を組むことができる学校として定時制・通信制があると考えると、その必要性は大きいと考える。

（委員長）定時制に求められる必要性は、変わってきている。多様な学び場が求められているなかで、そのニーズに応えていかなければならない。また、定時制の名称にこだわる必要もなくなってきている状況でもある。

（委　員）幡多地域には、清水高校、宿毛高校、大方高校に定時制があり、その中で、大方高校が幅広いニーズに対応している。通学範囲で考えると幡多は、良い配置であると考える。

各学校、多様なニーズをもつ生徒にきめ細かく対応していると思う。また、定時制に対するニーズは、今後もあると考える。

高知工業と高知東工業の定時制については、配置場所が近いのでまとめればよいと短絡的に考えてもらいたくない。それぞれの学校の生徒の通学している理由や教育内容が違っていれば存続すべきであり、通学理由や教育内容が同じなら統合を検討しても良いのではないかと考えている。通学している生徒のニーズを考えて判断すべきである。

（委　員）定時制・通信制を特別な支援を必要とする生徒や様々なニーズをもった生徒の受け皿としての存在ではなく、全日制より柔軟なカリキュラムを組むことができる柔軟な学びができる学校であると位置づけがされなければならない。前向きな捉え方をした方がよい。柔軟性を生かした学校づくりをしていけば面白い。大方高校や中芸高校などユニークな取り組みをしている。定時制の柔軟性を生かした学校づくりが望まれる。配置については、働きながら通う生徒もいるので、ある程度地域に散らばって設置しているほど良い。現在、定時制は、高知北高校以外は、少人数クラスになっているので、きめの細やかな指導ができているのではないかと思う。

定時制の工業高校は、２校しかないが、その２校の配置が中央部で近寄りすぎているので検討の必要があると思う。進路指導については、学習する場が定時制であっても、高校卒業は同じである。併設の定時制では、求人票などが回ってこない状況もあった。全日制と同じように、求人を開拓する努力も大切である。

（委　員）全日制を中途退学した生徒などを受入れるセーフティネットの役割もある。また、地域性を考えた場合、ある一定の地域に可能な限り存続をしてもらいたい。

（委員長）定時制・通信制の役割は変化してきているが、ニーズはある。予定の時間となったので閉会にしたい。

7　閉会

（1）閉会挨拶（高等学校課長）

（2）諸連絡